

論文要旨

論文題目「自殺企図患者の臨床的特徴について」

学位申請者 加藤 晃司

キーワード：自殺 リスク因子 広汎性発達障害
境界性パーソナリティ障害 再企図防止

[背景] 本邦における平成24年中の自殺者の総数は27,766人で、15年ぶりに3万人を下回ったものの依然として高い自殺者数である。海外においては自殺に関する観察研究がすでに多く行われており、さらには自殺再企図防止のための介入研究も進行している。しかし本邦においては自殺に関する観察研究が十分に行われておらず、自殺リスク因子の抽出が不十分な状態である。

[目的] 本研究では、思春期境界性パーソナリティ障害 (borderline personality disorder: BPD) と成人期広汎性発達障害 (Pervasive Developmental Disorders: PDD) の自殺企図の臨床的特徴を調査した。

[方法] 思春期BPDの症例報告に関しては、併存する精神障害の治療、BPDに対する患者本人への力動的療法と家族に対するアプローチを施行し、それに加えて認知行動療法的アプローチを行った。思春期BPDの観察研究では、2006年4月から2008年7月の期間に当院救命救急センターに自殺企図で入院となった20歳未満の患者79名（連続サンプル）を対象として、思春期BPDの自殺企図の臨床的な特徴について後方視的に調査を行った。成人期PDDの観察研究では、2010年4月から2011年12月の期間に自殺企図で当院救命救急センターに入院となった18歳以上の患者587名（連続サンプル）を対象として、成人期PDDの自殺企図の臨床的な特徴について後方視的に調査を行った。

[結果] 思春期BPDの症例では、自殺企図後に外来治療を行い自殺の再企図を1年半以上の期間防止することができた。思春期BPDの観察研究については、79名の思春期自殺企図患者の中でBPDは10名（12.7%）であり、BPD群において気分障害の併存、身体的な重症群は有意に多かった。成人期PDDの観察研究においては、587名の自殺企図患者の中でPDDは43名（7.3%）であった。男性、未婚、独居、適応障害の併存はPDD群で有意に多く、精神科既往歴、自殺企図歴、家族の精神科既往歴、家族の自殺企図歴、自殺企図契機、気分障害の併存は有意に少なかった。自殺企図手段は刃物、一酸化炭素中毒が

PDD群で有意に多かった。入院期間は、全入院期間、集中治療室（intensive care unit: ICU）の入院期間は共にPDD群において有意に長かった。

[考察] 思春期BPDの症例を通じて、再企図防止のためには併存する精神障害の治療、BPDに対する力動的療法と認知行動療法、それに加えて家族に対するアプローチを複合的に組み合わせることが有効であることを示した。次に思春期BPDの観察研究の結果、BPDは自殺企図時に高率に気分障害を併存しており、気分障害をスクリーニングすることで自殺企図を未然に予防できるかもしれない。また自殺企図時に併存する気分障害を治療することで思春期BPDの自殺再企図を防ぐことができる可能性が示唆された。成人期PDDの観察研究の結果、成人期PDDの自殺企図は重篤な手段を用いるため自殺既遂のリスクが高い可能性があり、再企図を防止するためにはPDDを適切に診断し疾患特性を理解した上でその後の精神科治療を継続する必要がある。また自殺企図時に適応障害を治療することでその後の自殺再企図を防止することができるかもしれない。

[結論] これらの研究の結果から、各疾患の自殺のリスク因子は異なり、さらには同一疾患においても各年代により異なる特徴を持っていることが判明した。自殺全体のリスク因子を抽出することは重要であるが、実際の臨床現場で自殺企図を予防し、再企図を防止していくためには各疾患、各年代の自殺企図の臨床的特徴を明らかにしていく必要があると思われる。